秋田県立博物館研究報告第42号　37～46ページ　2017年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.42, 37-46, March 2017

博物館職員と大学生とが「協働」する試み

－「秋田大学地域連携プロジェクトゼミ」実施報告－

伊　藤　　真*

１　はじめに

今年度、秋田県立博物館は「秋田大学地域連携プロジェクトゼミ」の学生２名を受け入れた。

「地域連携プロジェクトゼミ」（以下、「地域ゼミ」という）とは、秋田大学教育文化学部地域文化学科における３年次選択必修科目である。学生が地域の企業・団体等において社員や職員等と協働して業務に関わり、その中で「課題や資源を（再）発見し、解決策や活用方法を見出すことにより」地域貢献型人材としての実践力を養成することを目的としている(1)。当該学科が発足したのが平成26年であり、今年度の３年次学生はその１期生。すなわち、「地域ゼミ」は今年が開講初年度であった。

「地域ゼミ」受け入れの基本的な枠組については、前年度に秋田県教育委員会と秋田大学との間で覚書きが締結されていた。また、内容についても既に、次のように具体的な課題が学生に向けて明確に示されていた(2)。

「わくわくたんけん室(3)は当初、小学校の高学年以上を対象として想定していました。しかし現実としては、それ以下の年齢の小学校や未就学児童が多いのです。これらの幼児・児童のニーズに対応していく中で、正式なアイテムというわけではありませんが、ままごとや塗り絵など、遊び道具的なものも置かれるようになりました。これが、秋田の文化と自然への架け橋としての、本来の性質を損なう要素となり、「キッズルームみたいだ」という批判を受けることがあります。

博物館が秋田大学の学生諸君に期待するのは、わくわくたんけん室の現状を分析し評価した上で、イタヤ馬などのような、本来の趣旨に沿うアイテム、秋田の文化や自然に直結するアイテムを開発してもらうことです。そのためには、細かな調査・分析と柔軟な発想が必要とされます。…（後略）」。

今年度から担当となった筆者は、これらの枠組等に従う形で、初の試みとしての「地域ゼミ」の取組をすすめてきた。以下、その概要に加え、ゼミをすすめる中で博物館と大学との連携について考察したことも併せて記していきたい。

２　博物館×学生－「地域ゼミ」ならではの意義とは

具体的なプログラムの策定にあたり、意識したのは「地域ゼミ」ならではの意義についてである。言い換えれば、インターンシップや博物館実習との差異化を意識することであった。

特に、インターンシップは、博物館業務に関わることを活動のメインとし、学生の将来を見据えた目的を掲げている点で「地域ゼミ」と非常によく似ているとみられた。しかも、ここでは博物館が抱える問題、課題について考える時間も設定されることがないわけではない(4)。

博物館学実習にしても、大学の履修科目である点、博物館の業務を体験する点で「地域ゼミ」と共通している。また、この実習でも博物館が抱える問題、課題を見出させて解決に向けた提案をさせる場面が設けられることが多い(5)。

すなわち、学生に職場体験させ、その間に気づいた問題や課題を指摘し、何か提案させるといった活動に止まれば、「地域ゼミ」はインターンシップが履修単位化されたものという認識で結するとみられたのである。

そこで改めて「地域ゼミ」の目的を確認すると、いくつかのキーワードが浮かび上がっているようにみえた。一つは「協働」、また一つは「実践的」、そして「課題」や「解決」である。

「協働」とは職員と同等の立場で業務に携わるということ、「実践的」とは、体験を越えて責任を持って業務に取り組むということであろう。また、「課題」や「解決」がキーワードということは、目的を明確にして集中的に業務に取り組むという

*秋田県立博物館

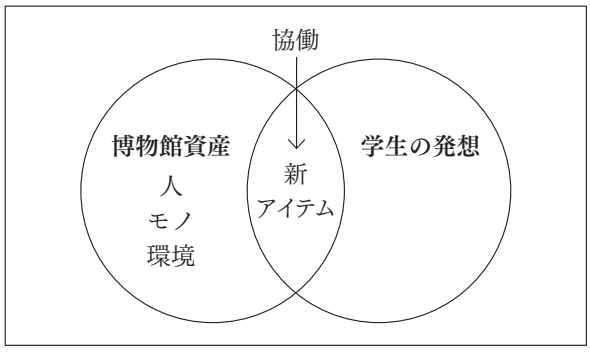
ことだろう。まとめると、「地域ゼミ」では、学生は職場の「課題」発見とその「解決」を目的に業務に取り組む。改善策を提示し、職員と「協働」してその実現に向けて「実践」する、と特徴づけられていることが窺えたのである。

インターンシップや博物館学実習では、学生はあくまでも「教えられる」存在であり、改善策を提案してもそれを実現することはない。また、業務体験も目的指向性は低く、網羅的である。

その特徴を意識することで、「地域ゼミ」が博物館と大学の双方にもたらす相乗効果への認識も強まった。つまり、大学は学生による地域貢献型の活動の機会を広げたい。一方で、学生の新たな視点や感性、努力から何らかの成果があがれば、博物館職員にとって刺激になり、博物館にとっても有為である。「地域ゼミ」ならではの意義はここにあると考え、新アイテム開発を本気でねらうプログラムを策定することにした【図１参照】(6)。

なお、プロジェクト学習の概念では問題発見も重要な要素であり、「地域ゼミ」でもキーワードとしているが、時間的な制約がある。テーマを提示し、絞り込んだ上での問題分析をゼミのスタートとする今回の方法は適切であったと考える。

図１　博物館×学生



３　学生たちの奮闘－「地域ゼミ」の実際

「地域ゼミ」について、大学からは総実習時間数を 50 ～ 70 時間（日数とすると 10 日～ 14 日）と想定していること、実施形態として次のＡ～Ｃの３つの型から選択することが示されていた。

Ａ　定期実施型　一定期間中、毎週または隔週等の同一曜日に一定時間
Ｂ　夏休み集中型　夏休み期間中の２週間程度
Ｃ　変則組合せ型　ＡとＢの複合など

事前の確認によると、大学生２人は秋田市外・県外出身者で、どちらもこれまで当館を訪れたことが無いという。博物館や秋田県の自然と文化などに関する知識・理解を身に付ける猶予が必要と思われた。また、工作アイテムの開発という創造性を要する仕事においては、討議や職員からのアドバイス、または来館者の反応などを受け止めながらの、試行錯誤する時間も必要と考えた(7)。

そこで、実習日程は「Ｂ　夏休み集中型」を基本としつつ、実習日の固まりを７月～ 10 月の間に分散して置くという形にした【表１参照】。加えて、学生のスケジュールの都合や来館者数が多いほど実習に好都合との判断から、実習日は土・日及び休日に集中的に置くことにした。

総実習日（時）数は 10 日（56 時間）(8)。大学が想定する日（時）数からするとやや少なめな設定である。ただし、一つの実習期間を終えた学生は次の期間までの間に、自宅や大学などで研修内容を振り返り、問題や課題の洗い出し、克服・改善に向けた検討など行わなければならない。学生の館外での活動については、必要に応じてメールで報告を求めたり、情報提供を行ったりして対応した。

（１）準備期（５・６月）

５月の連休を過ぎた土曜日にオリエンテーションを実施した。①博物館やわくわくたんけん室の現況についての概説、②「地域ゼミ」の目的や実施日程などの確認、③工作アイテムの実技と分析、④工作アイテム開発の方向性についての検討、と半日ながらかなり盛り込んだ内容だった。

当然、工作アイテムの開発というこの実習のテーマ、目的に沿った③④を重点的に行い、①②については簡潔に済ませた。また、学生の主体性を損なわぬよう、過剰な説明は避けた。例えば、「秋田の文化や自然との架け橋」となるアイテム開発が目的であるので、当館展示室の見学は欠かせないが、オリエンテーションの段階ではこれは実習時間外に自発的に行うよう指示した。

③にしても、実技や演習を通じて工作アイテムを体感し、それらへの理解を深めるよう仕向けた。工作アイテム分析でも説明は極力少なくして、学生が作業を通して理解するようにした。すなわ

表１　「地域ゼミ」実施日程

月	期	内　容	日(時)数	場所等
5	準備期	○オリエンテーション室とアイテムの概要 実施計画確認 開発方向性の検討	１日 （４）	博物館
6		○アイテム構想		館外 （メール）
7	開発機	A①展示分析 ②業務体験 ③アイテム開発	４日 (24)	博物館
8		B①業務体験 ②開発アイテム実践Ⅰ	３日 (18)	博物館
9	まとめ期	○検証（アイテム修正）		館外 （メール）
10		○開発アイテム実践Ⅱ ○まとめ	１日 （８）	博物館
11		○地域連携プロジェクトゼミ報告会	１日 （２）	大学
総実習日（時）数			10 日（56 時間）	

ち、工作アイテム 17 種を図２のようにグループ分けをさせた【図２・資料１参照】。学生たちはⅣ型のアイテム数が多い現況を読み取り、特にⅠ型のものを開発することが望ましいことを実感したようである。学生の一人は、アイテムを「技術重視傾向のもの」と「知識重視傾向のもの」という独自の視点でも分類を試みていた。

実技では、学生たちはイタヤ馬作りを選択して取り組んだ。このことを通して、文化や自然をアイテム化するときには、誰もが取り組むことができるようにデザインや仕組みを単純化したり、誰もが取り組みたくなるように装飾化したりする工夫を要することなどを、学生たちは読み取った。他、マニュアルの作成も開発の範囲と気づいた。

開発アイテムの方向性については、次回実習日の１週間前までに報告するよう伝え、終了した。

（２）開発期A（７月）

７月の実習期を前に、一人はアイテム企画として「プラ板銀線細工」を提案してきた【資料２参照】。これは「秋田銀線細工をプラ板に描き起こし」して再現するという工作アイテムである。秋田県産業労働部地域産業振興課が運営する『秋田の伝統的工芸品手しごと秋田』というサイトを見て、銀線細工に惹かれて着想したとのことだった。

望ましいのは図２でいうⅠ型と、オリエンテーション段階では理解されていたはずである。確かに、銀線細工は秋田の伝統的工芸品で「秋田の特色と関わりが濃い」ものである。しかし、当館には工芸部門があるがこの部門専用の展示室は無く、銀線細工も収蔵品はあるが展示していない。

この工作アイテム案は、図２中のⅢ型にあたるものといえる。Ⅰ型ではない。

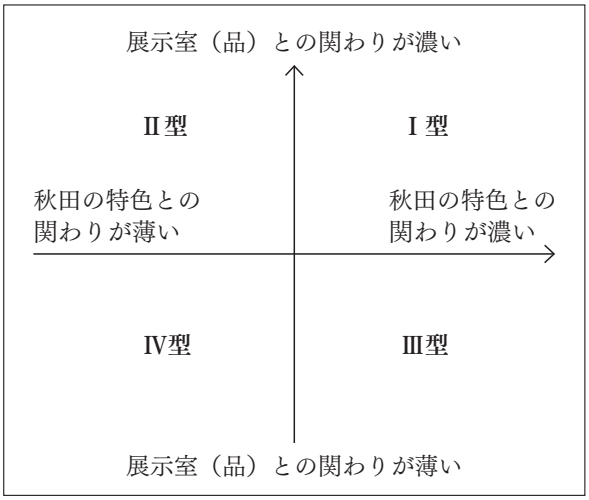
ただ、学生の提案を聞いているうちに新たな捉え方が思い浮かんできた。すなわち、わくわくたんけん室には伝統工芸品のコーナーがあり、ここでは触れることができる形で曲げわっぱ、ごてんまり等の秋田の工芸品を紹介している。このコーナーとの関わりを認めるならば、この提案の工作はⅠ型であるともいえるのではと思えてきたのである。むしろ、展示されていないものを取り上げたほうが、展示を補う意味が付加され、博物館アイテムとしての価値が高いとさえ思えてきた。

ともかくも、このように学生に説得されるような形で、提案の実現を支援していくこととした。

偶然であるが、当時、館では特別展「発掘された日本列島 2016」に関係してプラ板考古ストラップを制作中で、プラ板銀線細工の工作に必要な道具が揃っていたのは幸運だった。

なお、作成方法については、この段階ではプラ板に一般の工作者それぞれが「自分流」に「銀線細工のような精緻な模様を書（描）」いて作成するとしていた。これは後に、型紙を用意し、そこに描かれたモデルのデザインをなぞって写させるという手順に変更となる。

図２ 工作アイテム分析（４象限マトリクス）



もう一人は工作アイテムの案出に苦慮していた。そこで、7月の実習では、展示室分析（①）に時間をかけることにした。展示の理解がアイディア創出につながることを期待したのである。しかし、7月実習の基本線は、わくわくたんけん室における業務体験（②）に取り組みながらアイテム開発（③）を行うことである。2人には、アイテムに関する企画書の提出をこの期間の共通のゴールとして示した。

こうして、開発作業の進行度に違いがあったが、2人とも同じプログラムで実習をすすめた。

①では、人文展示室・学習展示室それぞれに常置している学習シート「わくわくシート」(9)の改善策をあげる活動を課した。先ず各人で作業に取り組み、その後にそれぞれが挙げた問題点や改善策について意見集約をする時間を設けた。問題点を指摘して改善策について協議するという活動では、アイテム開発が進まない学生も活発だった。意見集約の結果【資料3参照】は館内の会議で公表した。今後の改善の参考とする予定である。

②では、学生たちはわくわくたんけん室のカウンターに入り、工作アイテムの案内や説明、あるいは工作の援助にあたった。

①②については、学生の一人がレポートで「大学生という立場で、子どもに受けるアイテムは何かを考えることは容易ではなかったが、プロジェクトの前半で博物館内の展示室を見てまわったり、実際にわくわくたんけん室が普段行っている業務を体験することを通して、少しずつ見えていったような気がする。」と記している。

③においては、プラ板銀線細工をすすめる学生は、工芸部門担当職員より銀線細工の歴史や技術についての聞き取りをし、銀線細工への理解を深めながら企画を練り上げていった。具体的には、銀線細工のデザインを描いた型紙上に透明なプラ板をのせ、利用者に銀マジックでそのデザインをなぞらせる方式とし、その図案の作成を行った。その際、工芸部門担当職員からの聞き取りで学んだことを生かし、「平戸（ヒラト）巻き」とよばれる技法(10)をデザインに生かし、それを工作者にも伝えられるよう意識していた。また、マニュアルの原稿や銀線細工についての解説シートづくりなどにも着手していった。

もう一人は、室内の体験アイテムの一つ「ハノイの塔」(11)を自然展示室とつなげたデザインにする改善案を示してきた。そのドーナツ状の盤面に秋田に生息する動物のイラストと解説文とを貼り付けるというものである【写真1参照】。工作アイテムの範疇ではないが、「秋田の自然と文化との架け橋」となるものを開発するというねらいについては、このアイテム改善案も外れてはいないとみられたので可とした。

写真1　ハノイの塔 ゼミ終了（完成）時の写真

企画書【資料4参照】については、学生2人と筆者と3人で検討した。実現に向け、主に表2に挙げた課題について討議した【表2参照】。

（3）開発期B（8月）

開発期Bでは、学生たちは博物館見学を重ね、カウンター業務に従事しながら開発アイテムを仕上げ、最終日にはそれぞれのブースで来室者にアイテムを披露して、工作・利用させた。

プラ板銀線細工を提案する学生は、地域の文化遺産としての銀線細工の存在と魅力を、工作アイテムを通じて伝えたいとの意識を明確にした。

魅力を伝えるにはそれなりのクオリティーの工作物になることがポイントである。そこで、学生は銀色のペンを見つけてきて、また、試作を繰り返しながら型紙のデザインを整えた。筆者はコストについて注文をつけ、その大きさが調整された。マニュアル【資料5参照】、説明シート【資料6参照】、ブースに立てるミニ看板も用意し、工作アイテムの一般披露となった【写真2参照】。結果、2時間30分の間に22人の方に工作され、終了時点で6人の方が順番待ちをしているという盛況だった。学生もかなり手応えを感じたようで

表２　アイテム実現に向けた課題

工作アイテム開発『プラ板銀線細工』
・なぜ今、銀線細工を取り上げるのか。説得力ある説明ができるか。 ・銀線細工のクオリティーをプラ板でどれだけ再現できるか。 ・小学校高学年生が15～20分の作業でできるか。難易度を変えて３種類ほど用意するか。 ・分かりやすく魅力的なマニュアルを作成できるか。
体験アイテム改善『ハノイの塔「秋田の自然」』
・機知に富んだ魅力あるデザインを考案できるか。 ・なぜハノイの塔にそのデザインなのか明瞭に説明することができるか。利用者に何を伝えたいのか。 ・（工作レベルではなく）製品レベルで仕上げることができるか。 ・安全性や耐久性はどうか。

写真２　「プラ板銀線細工」ブースの様子

写真３　「ハノイの塔」ブースの様子

ある。開発アイテム自己評価シートには、あふれんばかりに具体的な反省点や改善策が書き込まれていて、この企画をもっと良いものにしようとする意欲がにじみ出ている【資料７参照】。

一方、「ハノイの塔」の改善を模索する学生は、秋田に生息する動物の図柄を、動物の体長の大小に合わせて円盤にデザインすることに決めた。小さな円盤に小さな動物、大きな円盤に大きな動物をデザインし、大きさを実感させるという。小学校高学年以上が魅力を感じるレベルにするよう注文を付けつつ、作業をすすめさせた。こちらは既存のアイテムでマニュアル等も備わっており、新たに作成する必要は無い。動物の選定とデザインに集中でき、一般披露に間に合わせることができた。

実際には、時間内に５～６組の方に利用されていた【写真３参照】。確かに、何も絵柄が無い無機質な円盤の状態よりも、「ハノイの塔」への興味を子どもたちに感じさせる効果があるようだった。また、県立博物館にあるにふさわしい玩具デザインにもなったことも確かである。

（４）まとめ期

10月の開発アイテム実践Ⅱでは、８月の実践における反省を踏まえた改善を加え、再びブースを構えてアイテムの一般披露を行った。

プラ板銀線細工の学生は、型紙デザインをなぞるペンの色を変える、前回あまり読んでもらえなかったマニュアルの配色やデザインを変える、プラ板の無駄が出ないように型紙のサイズを再調整する、型紙をただなぞるだけでなく工作者が創意工夫してアレンジできる部分を作る等の改善策を考えてきた。また、一般披露時にも、ブース近くにゴミ箱を用意したり、レンジ周りや圧縮直後のプラ板の熱さについて積極的に注意喚起を行うなど、それまでの経験を生かして行動していた。

「ハノイの塔」の学生も、利用者が期待ほどでなかった前回の経験を踏まえて、積極的に来室者に声がけをして利用を促していた。

「地域ゼミ」の目的や実習日程など、大枠については博物館側から示した。しかし、学生が自分たちで発想したことには、筆者や博物館職員はあくまでサポート役だった。ダメというのではなく、実現のためにどうすべきか、よりよい企画にするにはどうしたらよいかを共に考える立場であった。学生は、我々の援助を得ながらも、自らの発想を基盤に自律的に数々の課題を超えて、採用に足る

工作アイテムレベルまで辿り着こうとしていた。

この日の実習を終えて、学生の一人は次のようにレポートに記した。

「プロジェクトを終えて感じたのは、自分のアイディアが周りに通用することへの驚きと、実際に体験している人が楽しんでくれている喜びによる大きな達成感だった。」。

4　むすびにかえて

去る 11 月 17 日（木）、秋田大学手形キャンパスの「60 周年記念ホール」で「地域連携プロジェクトゼミ報告会」が開催された[(12)]。6 組の学生がそれぞれの実習内容や成果についてプレゼンテーションを行った。

博物館で実習をした 2 人は（良い意味で）異質だった。彼らは、開発したアイテムの提案から実現までの説明に発表のほとんどを費やし、いわば自らの企画をＰＲしているかのようだったのである。他の学生グループは、「職場体験をした、改善策を提案した、体験で学んだことは○○だった」というパターンの発表だった。インターンシップとは違う、「地域ゼミ」ならではの「実践的」な実習が、博物館において実現していたと思えた場面だった。

2 人は資料には次のように感想を記している[(13)]。

「私がこの実習中に感じたことは、秋田県立博物館職員の方一人ひとりが、学生である私に親身になってアドバイスしてくれた、本気になって考えてくださったということです。予算の検討をする際でも、博物館の予算は県民の税金で賄われているため、無駄遣いはできず、そしてそれは私が企画するアイテムにおいても同様であり、どうすればコストを削減できるかなども考えていてくださったことは、とても深く印象に残っています。また、伝統工芸という分野は中途半端な知識だけでなんとかなるものではなく、そのために博物館で所蔵している銀線細工に関する資料を多く提供してくださったこともうれしかったです。このプロジェクトを通して、物事を企画する際の金銭やものや人の流れ、必要な情報・根拠の提示など、働く立場になって企画運営するという貴重な体験ができました。」。

「実際にわくわくたんけん室に勤務してみて、子どもと接する機会や親の方々と話をする場面が多く、コミュニケーション能力が必要だと感じた。…（中略）…全体を通してみると、スムーズに進んだとは言えないかもしれないが、自分にとってあまり親しみのない博物館で、自分のアイデアを形にして残せたという経験は貴重なものだった。」。

秋田県立博物館では、「すべてを県民と共に」をスローガンに『中期ビジョン 2015 ～ 2019』を掲げている。したがって、これまでも県民と「共に考える」機会として秋田県立博物館協議会が活用されてきた。博物館学実習・インターンシップなどで博物館への提案を受けることもあった。また、博物館活動を「共に行う」ボランティアも活動域を広げてきている。

よって、ここで更に企画・「創造」[(14)] する部分でも「県民と共に」を標榜するとき、「地域ゼミ」は一つの貴重な機会たり得るのではなかろうか。

一方、全国的にも、大学パートナーシップやキャンパスメンバーズの設定[(15)]、大学生ボランティアの募集など、学生を博物館等に呼び込む動きが活発化している。学生の能力育成や地域貢献の場として博物館等が有効だという認識や、博物館としても若者を呼び込むことが館の活性化につながるとの考えが広まってきているのである[(16)]。

現在、プラ板銀線細工は来年度の実現に向けて準備をすすめているところである。

今年度は参加者が 2 人だったが、人数が増えれば学生のチームで協働して活動する態勢をつくることもできる。学生の主体性はもっと増し、プロジェクト学習としての意義は深まるだろう[(17)]。実践力を伴った具体的な提案こそ開発・改善の確実な力であるといえる。当館としても、単に大学の一講座を博物館が請け負っているという捉え方を越え、「地域ゼミ」は県民の力を取り込んで博物館を活性化させる有効な一手段でもあると認識し、連携をすすめるべきであると考えている。

註

（1）秋田大学教育文化学部「平成 28 年度地域連携プロジェクトゼミ実施要項」（2016 年）より。

（2）「プロジェクトゼミ説明会資料」（2016年1月25日）から抜粋。佐々木人美（当館館長）が執筆した文である。

（3）わくわくたんけん室とは、体験学習の場として当館に設けられている広さ333㎡の部屋である。「見て、触れて、試して、考える」アイテム（「宝箱」と称する）約80点のほか、10種あまりの「作る（工作）」アイテム（常置）や貝標本作り、しめ縄作りなどの季節限定の工作アイテムなどを通して、楽しみながら学ぶことを促している。

（4）実際、今年度実施されたインターンシップでは、「施設設備等の問題点の洗い出し」の時間が1時間ほど設定されていた。

（5）博物館学実習生による提案は、博物館に関心を持ち、関連した科目を履修して基礎知識を有している学生たちによるものであるから、博物館にとっても有為な指摘や提案が得られる貴重な機会となることがある。当館の場合、実習生の提案は担当者がまとめ、学芸職員に回覧している。これを問題提起としてとらえ、業務改善の参考にする職員もいる。

（6）大学生の主体性を博物館や美術館の運営に生かす取組がすすめられつつある。例えば、名古屋市立博物館では、企画「ナイトミュージアム」の立案から実施までを大学生に委ねている。学生とのキャッチボールは学芸員の資質向上に役立っているという。（『中日新聞』2011年9月13日）また、金沢21世紀美術館の「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」でも、18歳から30歳までの学生からフリーターまでを視野に入れた若者が、自分たちで企画したことをアーティストと協働創作・協働表現することで実現しているという。（玉村雅敏編著『地域を変えるミュージアム 未来を育む場のデザイン』英治出版 2013年）

（7）大野照文監修『京のイルカと学びのドラマ 京大と学校現場で紡ぐ「アクティブ・ラーニングをめぐる航海日誌』（京都大学総合博物館 2016年）には、「子ども博物館」のワークショップについて企画から実施まで任されて、試行錯誤を重ねながら奮闘する大学生の姿が描写されている。これはプロジェクト学習という実践的手法で行われている京都大学初年次教育ゼミの様子をレポートしたものである。プロジェクト学習とは、「一定期間内に一定の目標を実現するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した課題に取り組み、それを解決しようと チームで協働して取り組んでいく、創造的・社会的な学び」を学習方法としてとるものである。おそらく、「地域ゼミ」の名称から類推するに、秋田大学もこのことを意識している。

（8）オリエンテーションを除き、1日の実習時間は9：30～16：30（昼休み1時間を含む）の6時間を標準とし た。

（9）わくわくシート（展示室地図入り学習シート）は、小学生から高校生までが幅広く活用できる学習シート。展示物にまつわる問題を解き、あるいは展示物のスケッチなどをしながら秋田の文化や自然への理解を深めることができる。人文・自然の各展示室にビギナー・チャレンジ・エキスパートの3コースをそれぞれ用意している。シートは当館ＨＰに一太郎・Word形式ファイルでアップされており、各校でダウンロードし、それぞれの学習目標にしたがって書きかえることもできる。

(10) 銀線細工の銀枠中にはめ込まれた渦巻き状のパーツ、あるいはデザインのこと。秋田銀線細工そのものを「平戸細工」と称することもある。（秋田県教育委員会編『あきたの工芸 お宝発見ハンドブック～工芸技術編～』2007年）

(11) ハノイの塔は1883年にフランスで考案された知育玩具の一種。台の上に3本の塔が固定されていて、そのうちの1本に6枚の円盤からなる塔がはまっている。円盤は下にいくほど半径が大きくなっている。この円盤の塔を、ルールを守りつつほかの塔に移す。

(12)報告会は2回に分けて行われた。当日は1回目で、「地域ゼミ」参加学生グループ全12組のうち6組が報告した。他の実習先は、（株）あきた食彩プロデュース、（株）エフエム秋田、（株）十文字リーディングカンパニー、太陽印刷（株）、（有）たかえん、以上である。2回目の報告会は12月22日に行われ、その実習先は秋田ケーブルテレビ（株）、秋田県国際交流協会、大仙市子ども若者相談センター、藤里町、（株）むつみワールド、湯沢市だった。

(13)「2016年度第1回地域連携プロジェクトゼミ報告会」資料（2016年11月17日）より。

(14)「秋田県立博物館中期ビジョン2015～2019」の一項目として「展示の新しい見方を提案し、共に創り上げる県民参加型の展示企画を推進します。」（傍点筆者）との目標が挙げられている。

（15）国立科学博物館大学パートナーシップや各地国立博物館キャンパスメンバーズ等のように、博物館が学生の教育研究活動や文化に親しむ場を広めるために設けているもののほか、大阪大学キャンパスメンバーズのように大学が国立・公立・私立博物館と結んで学生や教職員に文化、芸術、科学などに広く自由に接する機会を提供しているものがある。地方博物館でも、（６）で紹介した名古屋市博物館のほか三重県総合博物館などがキャンパスメンバーズ事業をすすめている。

（16）当館でも今年、特別展「発掘された日本列島2016」において学生展示解説ボランティアを募り、これは活動に参加した学生にとっても、解説を受けた観覧者にとっても好評だった。名古屋市博物館では、企画イベントに参加した名古屋市立大学の学生がその後「博物館サポーター」を結成し、恒常的に博物館と学生とをつなぐ活動を行っているという（註（６）参照）。

（17）今回のように学生が２人と少人数で、しかも基本的に個々で課題に取り組む態勢では、職員のリーダーシップが強く出てしまいがちであった。例えば「単発的な体験学習になりがちな博物館学習」（佐々木正峰『博物館これから』雄山閣2009年p.170）を克服するアイディアなど、新たな発想を要する課題が博物館には山積している。これは、学生が活躍できる余地がまだたくさんあるということである。

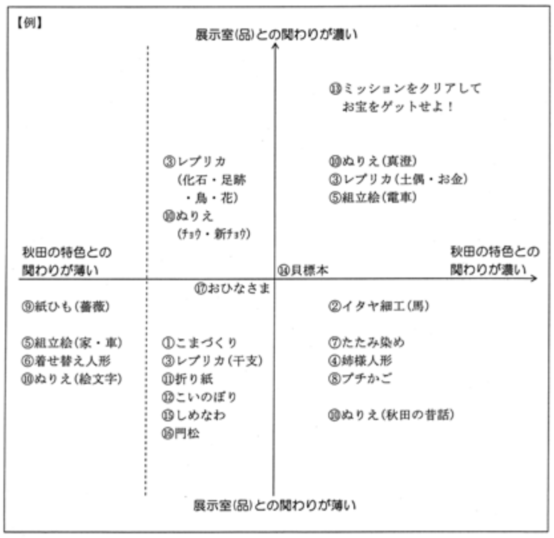
秋田大学地域連携プロジェクトゼミ
オリエンテーション①　2016/05/14

教育文化学部地域文化学科
学籍番号　　　　　　氏名

わくわくたんけん室工作アイテムの現況をつかむ

1　次の①～⑰は、現在、わくわく探検室で提供している工作アイテムです。これらを、本プロジェクトゼミの趣旨を意識した観点から性格分析し、分類（グループ分け）を行いましょう。

①こま　②イタヤ細工　③レプリカ（化石・土偶・お金・足跡・干支）　④姉様人形
⑤組立絵（自動車・家・電車）　⑥着替人形　⑦たたみ染め　⑧プチかご　⑨紙ひも
⑩ぬりえ（秋田の昔話・花・チョウチョ・新チョウチョ・鳥・真澄・絵文字）⑪折紙
⑫こいのぼり　⑬ミッションをクリアしてお宝をゲットせよ　⑭貝標本　⑮しめなわ
⑯門松　⑰おひなさま



資料1　工作アイテム分析

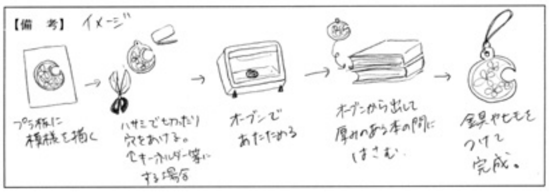
オリエンテーション②　2016/05/14

学籍番号　　　　　　氏名

2　1のアイテム性格分析を踏まえ、あなたはアイテム開発の方向性についてどのように考えましたか。具体的な構想があればそれも挙げて説明しましょう。

私が考えるアイテムの方向性について、最も優先したいことは"形に残るもの"をつくるということである。夏休みに行うものなので、夏休みの思い出として持ち帰れたり、そのまま夏休みの宿題として提出できるものが好ましいと考える。また、わくわくたんけん室は親子での利用がほとんどであるため、子どもだけでなく、親も合わせて楽しめる内容にしたいと思う。秋田らしさを重視しつつ、形に残る体験をしてもらいたい。それらを考慮したうえで、私が考えるアイテムは、『プラ板銀線細工』である。秋田銀線細工をプラ板に書き起こすというものである。本来銀線細工は細い線上の銀線を加工しつくるものであるが、コストや難易度を考えると、子ども向けとはいえない。そのため、100円ショップ等で売っているプラ板をつかって、銀線細工のような精緻な模様を描きつくる。そして、自分流の銀線細工をつくり、夏の思い出として持ち帰ってほしい。銀線細工はアクセサリーにもなっており、プラ板も加工次第でアクセサリーになりえるので、親→

【備　考】イメージ



資料2　アイテム開発の方向

秋田大学地域連携プロジェクトゼミ
プロジェクト1－1　　2016/07/15

教育文化学部地域文化学科
学籍番号　　　　　　氏名

展示室わくわくシートを改善する

人文・自然展示室の「わくわくシート」の問題点を挙げ、改善策を示しましょう。

【人文展示室】
○チャレンジコース
（全体）問題数が少ない。古代・中世の問題が無い。
…古代・中世の問題を増やして全体の問題数を増やす。インパクトがあるので、阿弥陀仏あるいは愛染明王を問題化するとよいのでは。
（部分）縄文(サケ)　問い方が曖昧。食べるため、信仰のためなど考えが拡散してしまう。…選択肢を設ける。
江戸(駕籠)　問い方。例えば「2つ以上挙げよ。3つ以上みつけたら駕籠博士」。自然展示室にあった問い方。学習者の意欲を喚起する。
近代(教科書)とてもおもしろい問題。
現代(雑誌)　今の子どもに6つ挙げさせるのは難しいのでは？父親と一緒ならば会話が生じるか。それにしても空欄は4～5でよいのではないか。
○エキスパートコース
（全体）自由記述が多く、難しい。
（部分）縄文(土器)　答えがつまらない。拍子抜けする。問い方を変えるか、問いそのものを変えるか。縄文の問題が多く、古代の問題に換えてもいいのでは。
中世(人魚)　答えに導く工夫が必要。
中世(リサイクル)　簡単。むしろチャレンジコースにあるべき問題。
江戸(商家)　3つ以上みつけよう、という問い方に。

【自然展示室】
（全体）自然展示室の問題は、総じて解いていて目を開かせられるものが多い。
○チャレンジコース
（部分）原油比べ　問い方。ねばり度の高い順に並べよう、とか。
由利原の原油量が少なく、粘度がわかりにくかった(展示の問題)。
硫黄鉱石　どんな臭いかと聞かれ、「くさい」としか答えようがない。実際、観覧していた少年はそうだった。「ゆでたまご」という答えは、そういう常識が身についてしまっている人の発想ではないか。
○エキスパートコース
（部分）貝 化 石　自分の見つけた貝の名が解答例に例示されていなく、もやもやした。解答例をもっと挙げてほしい(学校に戻って答え合わせするケースを想起)。

○本日の日程

9:30～	打合せ	14:00～	展示室見学
10:00～	展示室見学	15:00～	意見集約
12:00～	昼休み	16:10	終了
13:00～	分館見学		

資料3　学習シート改善案まとめ

秋田大学地域連携プロジェクトゼミ
プロジェクト1－2　　2016/07/17

教育文化学部地域文化学科
学籍番号　　　　　　氏名

開発アイテムについて検討する／カウンター業務に就く

アイテム名　プラ板銀線細工　　区分　(宝箱)・工房

1．目的性(何を目的としているかを具体的に記入)
銀線細工づくりを通して、秋田に受け継がれている銀線細工という伝統を、大人にも子どもにも知ってもらい、その認知度を高めるとともに、手作業によって行われる銀線細工の魅力（緻密さ、精巧さ等）が、機械ではなく人の力によってつくられていることを伝える。形に残るものとして、自分が手作業でつくったという思い出づくりにもつながる。

2．内容物（必要物）リスト・予算
◦工作用プラバン　◦オーブントースター
◦穴開けパンチ　◦油性ペン（白か銀が好ましい）
◦アルミホイル
◦はさみ
1アイテムにつき　200円未満

3．実物写真あるいは工作が伴う場合の設計図など
別紙参照

4．展示室との関係性など
銀線細工の技術が確立されたのは、江戸幕末期であり、院内銀山・阿仁鉱山等が銀を生産していた。種別としては金工にあたるので、人文展示室に展示されている秋田の金工コーナーと関連をもたせることができるのではないか？また、自然展示室内の鉱山関係の展示とも関連させることはできないか？

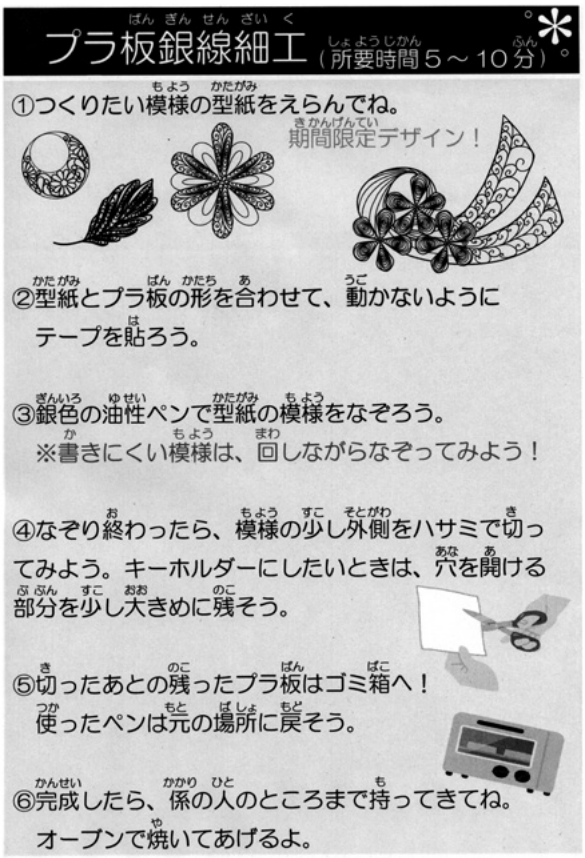
5．準備に要する期間
制作　15～30分

6．備考
≫銀線細工の魅力は、銀線1本が多様な変形をし、それが組み合わせてできているところなので、プラ板に線をなぞるときに、"一筆書きで"等の指定をすれば楽しめるのではないか。

○本日の日程

9:30～	アイテム検討	13:00～	レプリカ制作
10:00～	カウンター業務	13:30～	「盆踊りと昔語りと手仕事の夕べ」見学
12:00～	昼休み	16:00	終了（予定）

資料4　企画書



プラ板銀線細工（所要時間５～10分）

①つくりたい模様の型紙をえらんでね。

期間限定デザイン！

②型紙とプラ板の形を合わせて、動かないようにテープを貼ろう。

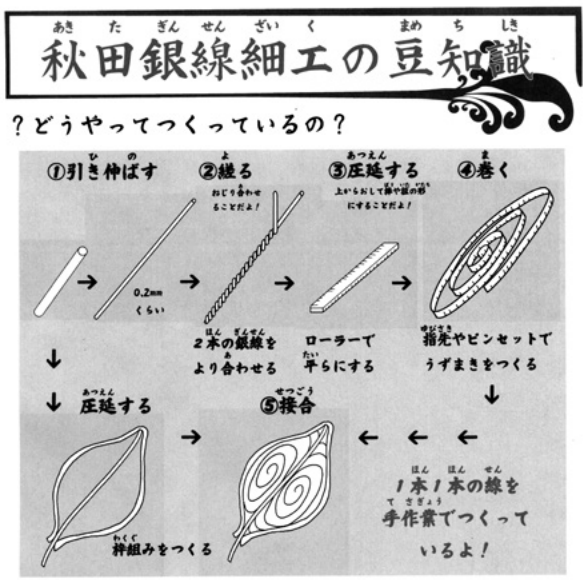
③銀色の油性ペンで型紙の模様をなぞろう。
※書きにくい模様は、回しながらなぞってみよう！

④なぞり終わったら、模様の少し外側をハサミで切ってみよう。キーホルダーにしたいときは、穴を開ける部分を少し大きめに残そう。

⑤切ったあとの残ったプラ板はゴミ箱へ！
使ったペンは元の場所に戻そう。

⑥完成したら、係の人のところまで持ってきてね。
オーブンで焼いてあげるよ。

資料５　工作マニュアル



秋田銀線細工の豆知識

？どうやってつくっているの？

①引き伸ばす　②縒る　③圧延する　④巻く

0.2mmくらい

２本の銀線をより合わせる　ローラーで平らにする　指先やピンセットでうずまきをつくる

⑤接合　圧延する

枠組みをつくる　１本１本の線を手作業でつくっているよ！

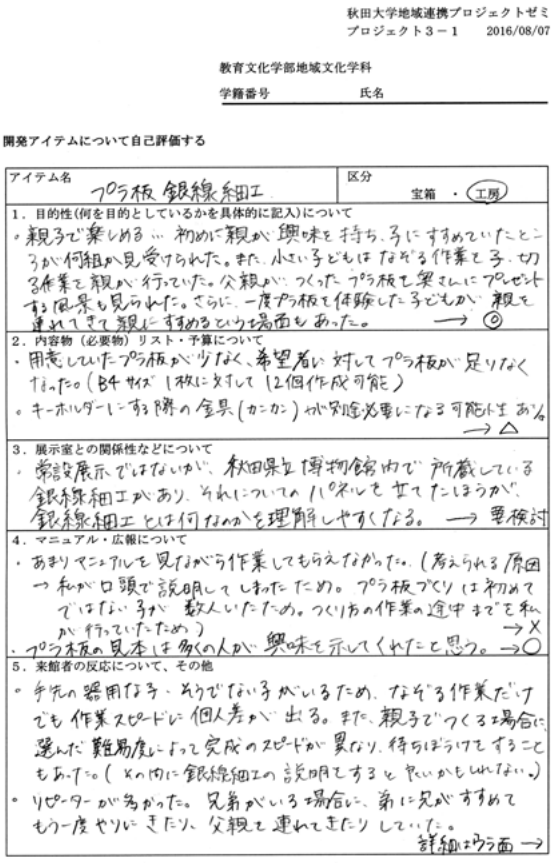
？いつごろからつくられているの？

江戸時代の初め（1665年）ごろには銀線細工の職人さんがいたとされているよ。

？どういったものになっているの？

ブローチやペンダント、かんざしやタイピンなどたくさんの種類があるよ。

資料６　アイテム説明シート



秋田大学地域連携プロジェクトゼミ
プロジェクト３－１　2016/08/07

教育文化学部地域文化学科

学籍番号　　氏名

開発アイテムについて自己評価する

アイテム名	プラ板 銀線細工	区分	宝箱 ・ (工房)

1．目的性(何を目的としているかを具体的に記入)について
・親子で楽しめる … 初めに親が興味を持ち、子にすすめていたところが何組か見受けられた。また、小さい子どもはなぞる作業を子、切る作業を親が行っていた。父親がつくったプラ板を母さんにプレゼントする風景も見られた。さらに、一度プラ板を体験した子どもが、親を連れてきて親にすすめるという場面もあった。 → ◎

2．内容物（必要物）リスト・予算について
・用意していたプラ板が少なく、希望者に対してプラ板が足りなくなった。(B4サイズ1枚に対して12個作成可能)
・キーホルダーにする際の金具(カニカン)が別途必要になる可能性あり。 → △

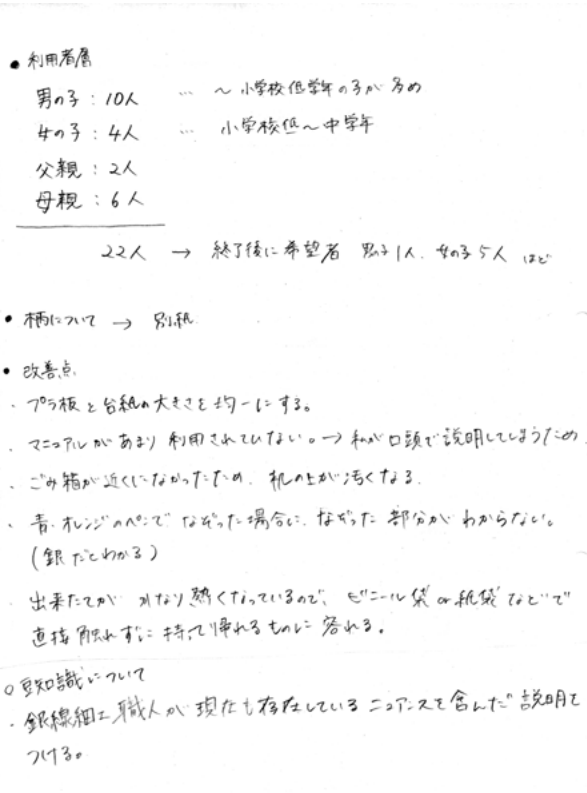
3．展示室との関係性などについて
・常設展示ではないが、秋田県立博物館内で所蔵している銀線細工があり、それについてのパネルを立てたほうが、銀線細工とは何なのかを理解しやすくなる。 → 要検討

4．マニュアル・広報について
・あまりマニュアルを見ながら作業してもらえなかった。(考えられる原因 → 私が口頭で説明してしまったため。プラ板づくりは初めてではない子が数人いたため。つくり方の作業の途中までを私が行っていたため) → X
・プラ板の見本は多くの人が興味を示してくれたと思う。 → ○

5．来館者の反応について、その他
・手先の器用な子、そうでない子がいるため、なぞる作業だけでも作業スピードに個人差が出る。また、親子でつくる場合に選んだ難易度によって完成のスピードが異なり、待ちぼうけをすることもあった。(Xの内に銀線細工の説明をすると良いかもしれない。)
・リピーターが多かった。兄弟がいる場合に、弟に兄がすすめてもう一度やりにきたり、父親を連れてきたりしていた。

詳細は裏面 →

資料７　開発アイテム自己評価（表・裏）



・利用者層

男の子：10人 … ～小学校低学年の子が多め
女の子：4人 … 小学校低～中学年
父親：2人
母親：6人

22人 → 終了後に希望者 男子1人、女の子5人 ほど

・柄について → 別紙

・改善点

・プラ板と台紙の大きさを均一にする。
・マニュアルがあまり利用されていない。→ 私が口頭で説明してしまうため。
・ごみ箱が近くになかったため、机の上が汚くなる。
・青、オレンジのペンでなぞった場合に、なぞった部分がわからない。(銀だとわかる)
・出来たてがかなり熱くなっているので、ビニール袋や紙袋などで直接触れずに持って帰れるものに箔れる。

○豆知識について

・銀線細工職人が現在も存在しているニュアンスを含んだ説明をつける。